

も み

やまおか いづる
山岡 石出



ぼくには二百四十六人の
兄弟がいた
見わたすかぎり
まわりは皆しんせき



ぼくらはそこで将来の
ことを語り合った
雨の日も暑い夏も
盛りにも
皆は口々に自分の夢を
話し続けた



聞かれてぼくは
種もみになりたい

そう答えた

そうすればぼくら
もと増えることが
できるから



兄は言った

働く人の力になる

姉は言った

わたしはかわいい女の子
のため

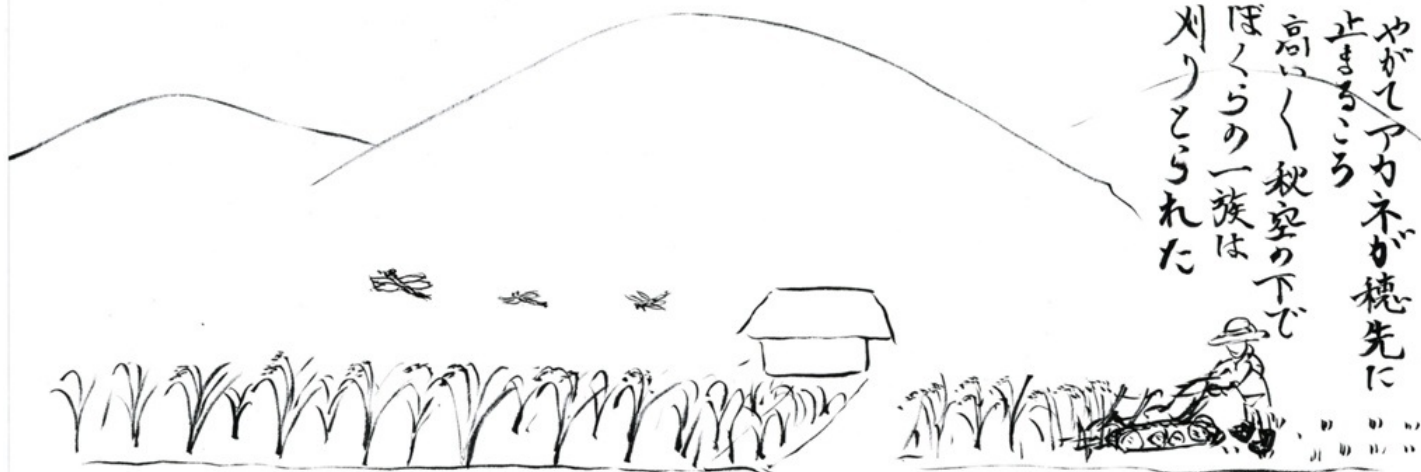
弟は言った

お年寄りを元気にさせる
きみは?

この世に生まれ
こんな立派な仕事は
ない

皆は深くうなずいた

やがてアサネが穂先に
止まるころ
高いく秋空の下で
ぼくらの一族は
刈りとられた



もみになったぼくらの
まわりはみんな知らない
顔ばかり

もうすぐ袋につめられる
順番まわ



お先にといいながら
みんなは次々に飛び
出して行く



おじさんは
ぼくの手前で
言った
よし、ここまでの
種もみにするぞ
残念 ぼくは普通の
お米になるしかない

袋につめられ
お店にならんだ



元気な男の子を連れた
お母さんがぼくの袋を
カゴに入れた

望んでいた種もみには
なれなかったけど

この元気な男の子の
口に入り大きくなるを
手伝える

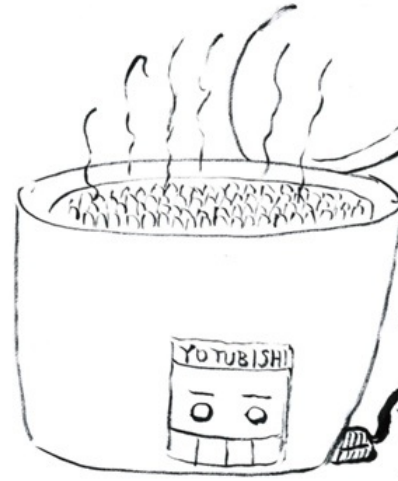
そう思うとぼくの心は
ふるえた

台所の流しの下ぼくは
その目を待ち続けた



いよいよその日の夕方に
きれいに水で洗われて
ぼくらはつややかに

炊き上げられ
どの顔もこの上なく白く
ほころびに立ち上っていた



小さな茶碗にさしりと
でもいつまでたってもハシが
のびてこない

おや、何か聞こえて
くる

やだっ 白い御飯なんか
ふりかけがなきゃい
だ

ごめんねお母さん 買い
忘れちゃった 今日
は

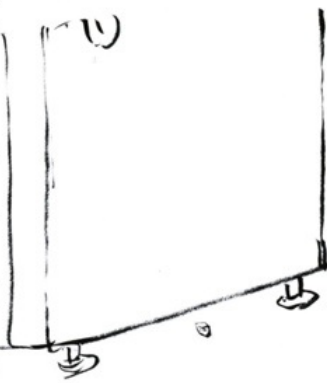
がまんしてね
やだっ やだよー ふうかけ
なきゃい
だ

こんなり 誰も食べられない
じゃない もうごはん作って
あげないよ

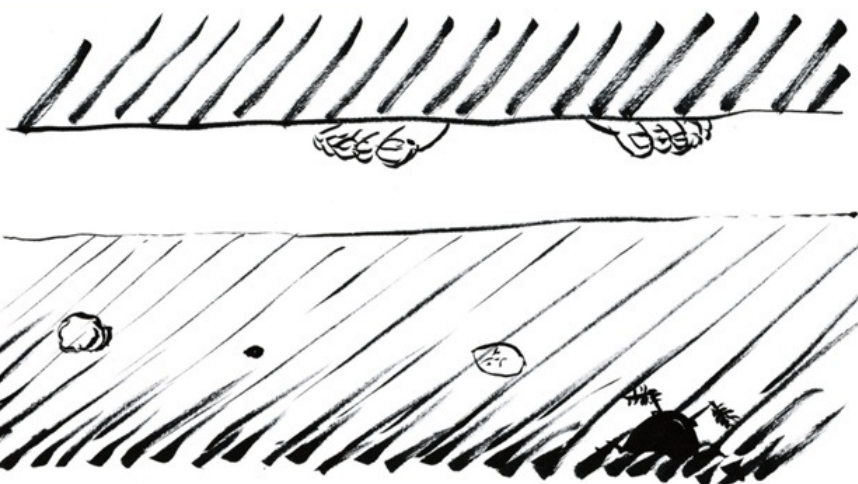


その瞬間 ぼくらは床に飛び
散って そばには二つに割れ
た茶碗とかけり
男の子は泣き続け 母親
怒った声がかこった

ぼくらは床の上でホコリ
だらけになりながら 母親の
ホウキに掃き集められた
ぼくのなかまはゴミ箱へ
でもホウキの先にはじかれ
て ぼくは冷蔵庫の下へ
ころがった



どれだけそこに居た
だろう



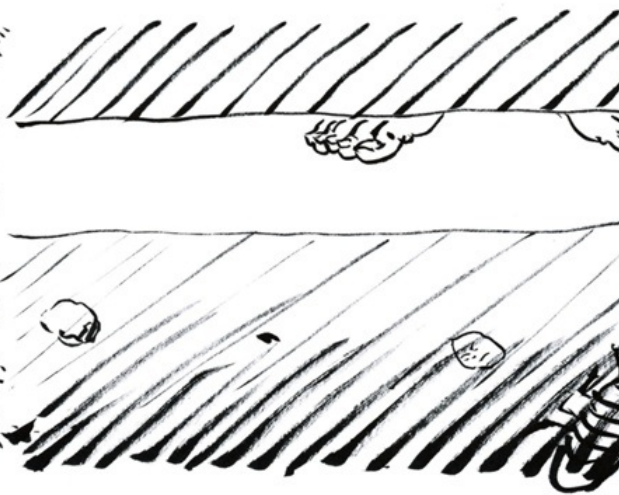
カラーに干からびた
ぼくのそばをときおり
生き物たちが通り過る
でも誰もぼくを欲し
がる者はいない
目をつむり生まれ故郷を
想い出す

広い水田で兄弟たちと
語り合ったあの頃を

希望に満ちたあの日々を

もし種もみになっていたら
今頃ぼくの孫たちは地を埋
めつくしていただろう

石のように乾ききり誰の役にも
立てぬ今こんな自分になろう
とは



ぼくのとなりには黒ゴマが
ひとつぶそのむこうには乾い
た大豆がいる 誰も何も言
わなけれどぼくにはその
気持が良く分る
体のひび割れは心のひび
割れ

どれ程時がたっただろう
突然頭の上が明るくなった

あの時と同じホウキが今度
は男の子の手でぼくを黒ゴマ
や大豆と一緒にチリトリへ
掃き入れた



母さん新しい冷蔵庫
置く前に掃除した方がよい
音がわりしにかけている中学生
ぼくらを床に投げ落したあの
男の子 母親よりも頭ひとつ
大きく見える

あの子に食べられていたなら
ば体を大きくするたためわず
かな力になれたのに
そう思うとボロ／＼泣けて
きたもう誰かから見まわ
さぬぬままぼくはゴミに
なっていく

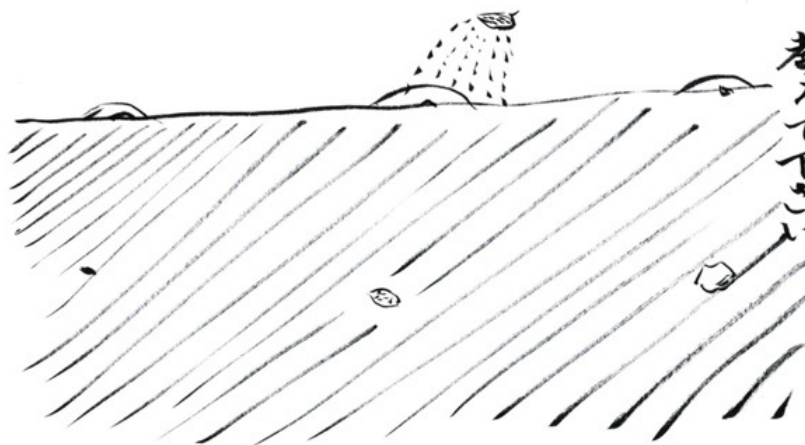
千うとぼくらをなめると
おやという顔をしながら

男の子は
うしろの庭へとぼくを投げ
捨てた



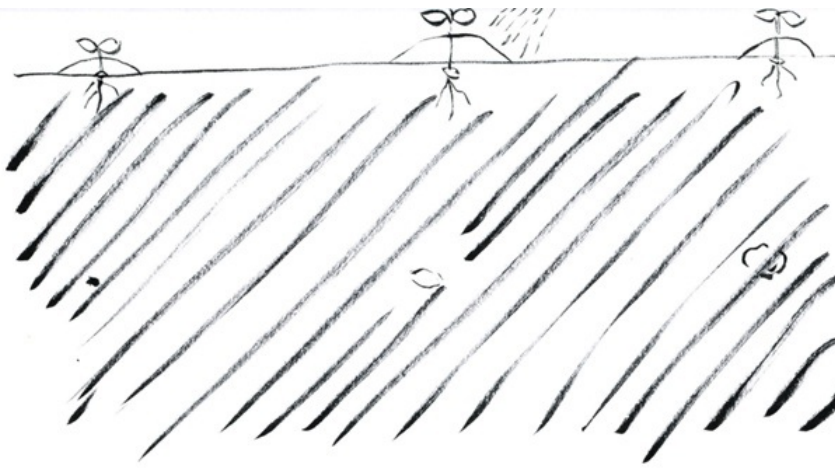
春の暖かな風に乗
り
さあうの花弁に別れを
おし
み
ぼくは花壇に
着地した
やがて土はやさしく
包んでくれ地のぬくもれと
湿り気で心持の良さは
悲しさを忘れさせて
くれた

半分はどろむその中で
でも尋ねずにはいられたか
た
一体ぼくの一生はなんの意味
があったのか誰でも良いから
教えて下さい



兄弟たちを想いつつ声をこ
ろして又泣いた

どれ程時が経たろう
 どれ程涙を流したろう
 地に埋れたやみの中
 ぼくは体半分とけかけて
 いた
 涙が自分をとかすのかもう
 意識がボンヤリとやみの
 かなたに遠のいていく



その中でもあまりに無数の
 生きものがうごめいているのに
 気がついた
 みなうれしげにぼくのとり
 かけた体のまわりに集って
 いる
 体がなんだかくすぐたい
 白くて細い糸のような根の
 先がぼくの体に入ってきた



もう目が見えぬ真黒の地
 中でいよゝゝ最後の時か
 来た

全てが消えると思ったら
頭の中に光がさした
体も頭も消えてなくなった
はずなのに

よく年は青い花になり



こうしてぼくは姿を変え
今日も明日も生き続ける

その年ぼくは赤い花
になった



もみ

<http://p.booklog.jp/book/36593>

著者：山岡 石出

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamaoka-izuru/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36593>

ブックログのパバー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36593>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.